

10. 自然現象

10-2-1. 気象・天候・災害

春先、海は2、3里沖まで氷(コンル konru)がつまった。ざくざくになって流れてきた水をテシルプ tesirup、固い氷をコンルという。

[時田岩吉氏]

メナシ menasi 東の風

[時田岩吉氏]

初雪は11月頃、根雪は11月半頃、根雪がとけるのは4月一杯か5月初頃。

[綱井チヨ氏]

沼(塘路湖)の凍結は、11月半及至末頃から、融けるのは4月末頃及至5月初め。根雪の解消よりも沼の氷の解消の方が遅い。

[綱井チヨ氏]

10-3. 天体

月食を見たことがある。そのとき、育てのおばあさんはアイヌ語で何か言いながら近所の家の前の広場で踊った。その時、近所の5、6人のばあさんも集まって、手をたたきながら草の枝を持って振りながら、おまじないを言った。

[増野光教氏]

10-4. 地理・地形

10-4-1. コタンの概況(人名、敬称略、録音記録の再生である)

今、西浜と呼ばれているところは、マサルカ番外地とも、アイヌ町とも呼ばれていた。自分の記憶では、大正7、8年頃の西浜には次のような人達の家があった(西から順に言う)。

- トチカ(戸塚) ジュンペイ 父(ヨウキチ)の姉の夫。
- ニシムラのおんこ
- ニシムラ・ラクサ(シュウサクの母)
- オンネチセのエカシ サシマ(差間) これが「酋長」の家系の人でクマを飼っていたし、皆をしきってもいた。この家にタケという同級生がいた。
- ヌキシオ(貫塩) 自分たち。
- イラ(伊良)(シュウサクの父の弟)
- トイ〜ドイ(マサキチの母親)
- コライ(古来) トキコ、トメコという娘がまだ嫁に行かないでいた。

- アカエカシ（オオタ・コウジロウの親の親。髪の毛が赤いのでこう呼ばれていた。）
- オオタ・コウジロウ（アカエカシの孫）
- イガ・リョウジロウ、イガ・ヨシサブロウ（父と息子。同居）
- シラセ・シュウコ（女性） 夫がいた。この人の両親も覚えている。（ウチャシクマすれば、差間の系統らしい。[時田岩吉氏]）
- イシダ・オスジロウ（ニシムラ・トクマツという人の兄。「ばば」といっしょに住んでいた。母親の妹、ヨネコに育てられていた。）
- トキタ・カンスケ（カンサクの父）
- メクラオンバ（カンスケの家の前。音別から来た「ばば」。）
（さらに、まだ家があったようだが、調査を中断した。）

[貫塩米太郎氏]

石炭岬の水汲み場のところで、地内（ちない）氏が昭和12年にクマ祭をしたことがある。これが白糖市街で最後のクマ祭となった。

[時田岩吉氏]

西浜のアイヌは、漁師かまたぎだった。炭岬（石炭岬）のアイヌはコンブを採っていたが、西浜では採っていなかった。

[貫塩米太郎氏]

和天別には、甲、乙、丙、丁の4区があったが、乙区には差間サシチが住んでいた。西浜の人もここに畑を持っていて、男達が「やとい」で漁に出た後、「やまご」で山に行った後など、女達が農家をやった。また、茶路の人も、石炭岬の人もここに畑を持っていた。

[貫塩米太郎氏]

和天別、チャロのアイヌは農家や木こり（「やまご」）をしており、他のコタンは浜のコタンなので漁業をしていた。しかし、浜にも猟を専門とする人（かめだ・けいぞう）がいた。

[地主義雄氏]

和天別には、戦後軍馬補充部の跡地に和人が入殖した。

[地主義雄氏]

茶路には、地主トヨタロウ、イラ（シュウサクの父）、トチカ・ジンペイ、トヨオカ、サルガ（ブンジロウの父親）、サシマ・サンノスケなどが住んでいた。

[貫塩米太郎氏]

10-4-2. 地形名称

チャロの上流に、阿寒の方へ行く道がある。昔の人は川をたよりに往来したものだ。場所場所にアイヌ語で地名をつけていた。ピラ pira は、がけ、ポンピラ pon pira は、小さながけ、オンネピラ onne pira は大きながけのこと。オンネナイ onnenay は大きな沢。

[増野光教氏]

海岸段丘をマサルカ masarkaという。

[時田岩吉氏]

海をアトウイ atuyといい、沖をレプン repunという。アトウイソ atuysoというのは、カムイノミの言葉で、波のない平な海面をいう。

「潮引き」をシララ sirara という。このときミミを取りに行く。「潮がこむ」ことをシララカsirarkaという。タント シララ tanto siraraと言えば、「今日は潮引きだ」ということだ。

[地主義雄氏]

10-4-4. 地理・地名

ウコタブヌプリ ukotapnupuri という山がある。ウコタブ ukotap は抱き合うという意味だと、育てのばあさんが教えてくれた。「二つ山」とシャモは呼んでいる。二つの山が抱き合うように並んでいるからだ。

[増野光教氏]

イワエトウ iwa etu という岬が茶路川の向こう、和天別の河口にあった。ここは敬って大事にした。沖に出た舟の目印になるかららしい。出猟のとき簡単なカムイノミ kamuy nomi する。その時に拝む。沖で時化になったときはお祈りをしたらしい。

[増野光教氏]

白糠には西浜(マサルカの浜手より、段丘(マサルカ)の下、アイヌ町、下町とも呼ばれた)、和天別、チャロ、石炭岬(「たんざき」と呼ばれた)、サシウシにコタンがあり、昭和10年までは各コタンには必ず一人、伊良のような「神主」(カムイノミをする人)がいた。昭和20年にはもうほとんどいなかった。

[時田岩吉氏]

当時は西浜(石炭岬)にコタンがあり、明治初期には今の和天別の「ウレシパチセ」があるところにコタンがあったが、明治32年、軍馬補充部ができてから、1町部弱の土地をもらって山の方に追い出された。(今のパナウンルベシベというところーポンピラから大苗のペナアンルベシベの間の茶路川西岸に追い払われた)。しかし、川に土地を削られ、漁師になるために浜(石炭岬、シラリカブ)へ下りてきた者も多い。石炭岬ではクマ送りをした。 [地主義雄氏]

刺牛に時田伊平の給与地があったが人に盗られた。

[時田岩吉氏]

和天別と白糠の間にオソロコツ osorkotという、男が7、8人入れる位の落とし穴のような穴があった。そばに小さな川が流れている。尻餅をついて小便をしたような跡に見える。

[菊池カヨ氏]

パシクルトの名の由来は、貫塩氏はパ シリ クルだと言っていた。また、シジミ貝が多く(昔はカキも採れた)、鳥が集るからとも言われている。

[地主義雄氏]

パシクルトは、生き物である。女と同じで、生理のように出口が破れたりふさがったりする。(写真)

[菊池カヨ氏]

サツナイ satnay という川の名の意味は、年寄りと同じで生理がなくなった川のことだ。

[菊池カヨ氏]

茶路にあるオサツペという沢は、ふだん水がないが、雨が降るとどっと水が出てくる。

[菊池カヨ氏]

海岸は、パシクット paskutto から釧路まで、ずっとハマナス浜だった。

[時田岩吉氏]

コイトイ川というのは波打ち際で河口がふさがる川の意味だ。

[時田岩吉氏]

橋はルイカ ruyka という。チキサニ cikisani の木が倒れ、橋になるとチキサニ ルイカ cikisani ruyka という。

[地主義雄氏]

白糠にテレケナイ terkenay という川がある。跳ねれば渡れる川だ。

[時田岩吉氏]

根室にあるシベツというのは、シペツ sipet で、大きい川という意味だ。

根室にあるチャッシ cassi というところは、平なところで、アイヌが真産を敷いて祈るところだ。

ここら辺のアイヌは、根室の方から来たという言い伝えがある。ロシア人がきたので、根室の方にいられなくなったそうだ。

ナイ nay というのは、山と山の間を流れる川で、オンネナイ onne nay というのは大きなナイ nay という意味だ。鶴居にある。ポンナイは小さな沢という意味だ。

タクコブ takkopuというところは、お握りを大きくしたような大岩(「生き石」)が土壁に挟まっているところだ。

白糠というのは、シララカ sirarka というが、波のない、「ペツタリ風」のことだ。

刺牛(サシウシ sasiusi)というのは、「住んでいるところ」という意味だ。(サシ sas というのは「コンブ」のことだ。

[地主義雄氏]

ショロという地名の意味は分からない。

昔、国鉄雄別線が走っていたとき、次のような駅の名前があった。

ピラウトウンナイ pirautunnay 山が裂けて破れて、膚がでているところの間

オンネピラ onnepira 大きな崖(がんけ)

ユツパナイ yuppanay 鹿が出る沢 「いたよ、鹿(が)」という意味だ。

舌辛の意味は、土地をもらって、川の縁に住んだところ、夜明け方、鶴が飛ぶ高さで、「シタカラ、シタカラと鳴いて飛んで行く神様がいた。」ということだ。

雄別の炭坑が閉山になったのは、「舌辛」を「阿寒」に変えたからだ。神様の付けた名前を変

えたらだめだ。

布伏内 (フブシナイ hupusnay) というのは、松 (フブ hup) の沢という意味だ。布伏内の沢には、雑木ばかりが生えていたが、奥に3本、高さ1 m位の松があった。それが目だったので、このような名前になった。

布伏内の川下にフシココタン (フシココタン husko kotan) というところがある。父がいうには、もとアイヌが住んでいたが、屯田兵に追われて川上に移ってきたので、そう名付けられたそうだ。このフシココタンに「イムをするババ」が住んでいた。

[伊良ユリ氏]

ショロはソ オロ ルとか、ソ ウン ベだ。

[地主義雄氏]

10-4-5. 遠隔地との交渉、交通路

函館から向う (青森以南) はフレシサンと言った。

[菊池カヨ氏]

舌辛、鶴居にもアイヌが住んでいた。

[時田岩吉氏]

父と舌辛のクマ祭に行ったことがある。茶路を出て、ショロから山越して、雄別の鉄道線路に出て、それ伝いに上り、布伏内に着いた (昭和5年のクマ祭)。

[地主義雄氏]

(陸別から来た人はいるかとの間に) 大昔は道路がなかったから行き来がなかった。

[地主義雄氏]

貫塩喜蔵の先祖は、北見の方からやってきた姉妹2人にさかのぼるそうだ (本人から聞いた)。

[地主義雄氏]

越野シユの夫の弟が釧路へ婿に行った。

[増野光教氏]

足寄へ行くには茶路川を上り、「二股」と言われたところ (ホクシン小学校があった) の右股に入る。さらに4里か5里行くと上茶路 (かみちゃろ) の右股と左股があって、右股 (チクベニナイ cikupeni nay) に行くトラワンに出、左股に行くと足寄に出る。上茶路の開拓農家の人は本別に用足しに行く方が白糠に出るよりも早いと言っていた。

[貫塩米太郎氏]